

つらい思ひに沈みはてて了ふといふ意。○民部卿の典侍 後堀河院の民部卿の典侍。「典侍」は内侍司の第二位の女官。○せうと「兄人」(せひと)の意で、兄の義だが、轉じては姉の事にもいふ。○さる人の子 然るべき人の子、立派な人の子。定家の如き立派な歌人の子としての意。○あやしき歌 拙い歌。○人には聞かれじ 人に聞かれまい、人の耳には入れたくない。○あながちに 強ひて、一概に、遮二無二。○つゝみ給ひしかど かくして居られたが。歌を詠んでも、それを聴して人にお見せにならなかつたがといふ意。○はるかなる旅の空おほつかなきに 遠い旅の空が不安さに。遠い旅の空にある私の身の上をいへる御心配下されてといふ意。○あはれなる事 情深いこと。○いかばかり 下の「鳴くらむ」に掛る。○子をおもふ鶴 鶴は子煩悩で有名な鳥、それで阿佛尼に喩へたのである。白氏文集に「第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴」などあつて人口に膾炙してゐる。○飛び別れ 子に別れて飛んで行つて。これも阿佛尼の子供を京に残して鎌倉に行つたのに喩へたのである。○ならはぬ旅 なれない旅。○鳴く 鶴の「鳴く」に尼の悲しみ「泣く」を掛けた言葉。○文の詞につゞけて手紙の中に歌を書く場合は普通別行にするのであるが、さうせずに、そのまま續けて書いてあつたといふのである。○人よりは 外の人よりは。○なほざりならず覺ゆ 「注意深いやうに思はれる」といふ解が一般に行はれる。なるほど前に「さる人の子にて」云々とあるその文句から推せば、歌として殊更に書き立てぬ用意が他の人よりも行届いてあるといふやうに考へられて、この解がしつくりするやうだが、「なほざりならず覺ゆ」といふ言葉自體の感じはそれは少し違ふやうに思ふ。續拾遺の「別れけむ昔にあはぬ涙こそなほざりならず悲しかりけれ」新後拾遺の「誠ぞと思ひ定めぬ夕暮のなほざりならず待たるらむ」など、何れも、眞剣に、心の底からといふ趣である。「なほざり」といふ言葉も、辭書に「深き注意を拂はず」といふ解もありはするが、幾多の例に徴して見るに、それも不注意といふより、つひ一寸、本氣でなくの方だと思ふ。そこでこの文句も、注意深く思はれるといふ方でなくて、しみじみ實意が籠つてゐるやうに思はれる、しんみにありがたく感ずるといふ方だと

思ふのである。○それゆゑに 子を思ふ故に。「それ」は下の句を承けてゐるのである。○蘆田鶴 たゞ鶴といふのと同義。鶴は蘆の生えてゐる所に多く居るからの稱。○子を思ふかた 子を思ふといふ方面の心の意だらう。「かた」は一方「湯」の意で鶴の縁語でもあるのだらう。萬葉集に「和歌の浦に潮満ち來れば湯をなみ(干湯がないために)蘆邊をさして田鶴鳴き渡る」などある。

そのついでに、故入道大納言、草の枕にも立ち添ひて、夢に見えさせ給ふよしなど、この人はかりやあはれとも思さむとて、書きつけて奉る。

都まで語るも遠し、おもひ寝に、  
忍ぶむかしの夢のなごりを。

はかなしや、旅寝の夢に迷ひ來て、  
さむれば見えぬ人のおもかけ。

など書いて奉りしを、又あながちに便たづねて、返事し給へり。さしも忍び給へりしも、をりからなりけり。

あづま路の草の枕は遠けれど、  
かたれば近きいにしへの夢。



いづくより旅寝のゆかに通ふらむ、

思ひおきつる露をたづねて。

など宣へり。

【通解】 この御返事の序に、故入道大納言が、旅寝の枕邊にも立ち添つて、夢にお見えになるといふ事など、この人だけはしみくあはれと思つて下さる事だらうと思つて、書きつけて差上げた。

都まで語るも遠し、おもひ寝に、

忍ぶむかしの夢のなごりを。

(亡き人を深く思ひながら寝て、なつかしい昔の事を夢に見ましたが、さてその夢の名残を都のあなた様に御話し申すにも、こゝは遠く離れた田舎の事で、なか／＼まゝならぬ次第で御座います。)

はかなしや、旅寝の夢に迷ひ来て、

さむれば見えぬ人のおもかけ。

(亡き夫が、どこからともなく旅寝の夢に迷つて現はれて来て、而も目が覚めればもうその御姿は見えません。誠にはかない事で御座います。)

など書いて差上げた所が、先方から又強ひて便を求めて、御返事をして下さされた。自分の歌は人に見せぬと、あれほどおかくし遊ばされたのも、場合による事であつたのだ。それで、

あづま路の草の枕は遠けれど、

かたれば近きいにしへの夢。

(あなたが旅寝をして居られる鎌倉は、随分遠い所ではありますが、戀しい昔の夢を語れば、遠い東國も近く思はれ、又遠い古へもつひ近い事のやうに思はれます。)

いづくより旅寝のゆかに通ふらむ、  
思ひおきつる露をたづねて。  
(爲家卿は、深く心に懸けて、この世に残して置かれたあなたを尋ねて、どこからまアあなたの旅寝の床に通つて来られるので御座います。思へば誠にいたはしい事でありませう。)

などいふ歌を下された。

【文旨】 前節からの續きで、定家卿の息女との贈答を書いてある。こゝは亡夫の事をその兄弟である人の所にいうてやるのであるから、自然一入真情が籠つてゐるためであらう、「はかなしや」の一首の如き、かなりしんみりしてゐる。勿論優れた歌とはいへなからうが、例のうるさい掛け言葉などもなくてすなほな歌だと思ふ。

【通解】 ○そのついでに、御返事の序に。○故入道大納言 筆者の亡夫爲家。○草の枕にも立ち添ひて、旅寝の枕許にも離れずつき添うて。旅寝に在つても絶えずその人の夢を見ろといふのである。○よしなど、次第などを下の「書きつけて奉る」に掛る。○この人ばかりやあはれともおぼさむとて、この方だけはあはれと思つて下さるだらうと。外の人は兎に角、この權中納言の君は爲家卿の同胞だから、しみくあはれと思つて同情を以て聞いて下さるだらうと思つてといふのである。○都まで語るも遠し、都にあられるあなた様に語るのも仲々遠い。都にあたらしく御物語して心を慰めませうのに、筆を通して遠く都まで申上げるのであるから、仲々思ふに任せませんといふ心持だらう。道程の遠いといふ外に、昔の事が既に遠く時をへだてたといふ心持も幾分含んでゐる。少くも返歌の作者はさういふ心持でこの歌を見てゐるやうである。○おもひ寝 人の事を思ひつゝ寝るこゝ



と。○忍ぶ、なつかしく思ひ出す。○夢のなごり、心に残つてゐて忘れ得ぬ夢の面影。○はかなしや、はかないことよ。「はかなし」は、たよりにない、頼みがたいの意で、今日普通に使はれる通りの内容である。その面影が夢には見えてもさめれば見えぬ、それが誠にはかないといふのである。○旅寢の夢に迷ひ来て、旅寢の夢の中に迷つて現はれて来て。「迷ひ」は死者の魂が宇宙に迷つて居るのをいふ。亡き夫が夢に見えるのを「迷ひ来て」というたのである。○あながちに、強ひて、たつて。○さしも忍び給へりしも、あれほど自分の歌を人に見せないやうにおかくしになつたのも。○をりからなりけり、場合による事であつた。平生はかくしても場合に依つてはさうとも限らぬので、今度は次のやうな二首の歌をお遣しになつたといふ意。○かたれば近きいにしへの夢、昔の夢の事も話して見れば近く感ぜられる。「近き」には、東國が近く思はれるといふ意と、遠い昔も近く思はれるといふ意と、兩意を兼ねてゐる。○思ひおきつる露をたづねて、「思ひおきつる」は思が残りながらあとに残して置いたの意、「露をたづねて」は旅寢の草枕の露を尋ねての意。「おく」は露の縁語でもある。つまりの意は、愛着の心を残して死んだ最愛の妻を尋ねて、その旅寢の夢にも亡夫が現はれて來るといふのである。

夏のほどは、あやしきまでおとづれも絶えて、おほつかなさも一方ならず。都の方は、志賀の浦浪たち、山、三井寺のさわぎなど聞ゆるも、いとどおほつかなし。辛うじて、八月二日ぞ使待ち得、日ごろよりおきたりける人々の文どもとり集めて見つる。

**通解** 夏の頃は、不思議な位都からの音信も絶えて、氣掛りさも一通りでない。都の方は、近江の邊が騒しく、比叡山や三井寺の騒動があつたなどの噂があるにつけても、益々氣掛りである。やつとの事で、八月二日になつて、待つてゐた都の使が着いて、ふだんから書いて置いてあつた人々の色々な手紙を、皆いちどきに見た。

**文旨** 夏頃になつてはつたり都からの音信が絶えた。どうかどうかと氣掛りてたまらぬ。近江邊の騒動、僧侶の騒ぎなど、噂に聞くにつけていよゝ心配でたまらぬ、漸く八月二日にたまつた手紙が一度に届いて來たといふのである。以下その人々の手紙について書いてゐる。「山、三井寺のさわぎ」は語義に記す如く史實が明かであるが、「志賀の浦浪たち」の史實は明かでない。そんな事に掛けてはよく行き届いてゐる古註にも考證がない。地方的一揆のやうなものでもあつたのかと思ふ。

**語義** ○夏のほど、夏の頃。○あやしきまで、不思議な程、變に思はれる位。○おほつかなさ、氣遣はしさ、氣掛りさ。○志賀の浦浪たち、「志賀の浦」は近江琵琶湖畔大津邊の稱。「浪たち」は騒動の起つたのを、「志賀の浦」の縁で斯ういうたのである。「しがのうら」なみたち」と讀むのだらう。「志賀の浦浪」といふ成語はあるが、「たち」だけ孤立させるのは文調上文義上變なやうである。○山、三井寺のさわぎ、「山」は比叡山延暦寺。「三井寺」は園城寺。この兩寺の僧侶がさわぎ立つたのをいふ。帝王編年記に、「弘安元年五月十二日巳時、日吉神輿三基入洛、是依園城寺金堂供養也、十六日、日吉神輿各歸座」とあり、又一代要記弘安元年の條に、「五月四日、八幡神輿入洛東寺着御、同八日歸座、同月十二日辰刻、日吉神輿下洛、八王寺三宮十禪師赤山衆徒訴訟根源者、今日三井寺金堂供養被准、後齋會又赤袈裟救旨事云々、於宣旨者、可召使之由院宣、同十五日被下之。仍神輿歸山、座主者前大僧正公豪也、奉下神輿之衆徒歸山之次、燒拂鹿谷隆辨僧正坊了」とある。○使待ち得、待つてゐた使が來て。○おきたりける人々の文、こちらへ届けすに、そのまゝ置いてあつた京都の人々の手紙。○とり集めて、とりまとめ、一緒にして、皆いちどきに。

侍従の宰相の君の許より、五十首の和歌を詠みたりけるとて、清書もしあへすくだされたり。歌もいと



をかしくなりにけり。五十首に、十八首點あひぬるもあやしく、心の闇のひがめこそあるらめ。その中に、

心のみ隔てずとも、旅路

山路かさなるをちのしら雲。

とある歌を見るに、旅の空を思ひおこせて詠まれたるにこそはと、心をやりてあはれなれば、その歌のかたはらに、文字ちひさく返事をぞ書き添へてやる。

戀ひしのぶ心やたぐふ、朝夕に、

行きてはかへるをちのしら雲。

又、おなじ旅の題にて、

かりそめの草の枕のよるくを、

思ひやるにも袖ぞつゆけき。

とある所にも、また返事をぞ書き添へたる。

秋深き草の枕にわれぞ泣く、

ふり捨てて來し鈴蟲の音を。

又、この五十首の歌の奥に、詞を書き添ふ。おほかた歌のさまなど記しつけて、奥に、昔の人の歌、

これを見ばいかばかりかと思ひつる

人に代りてねこそ泣かるれ。

と書きつく。

【通解】侍従の宰相爲相殿の所から、五十首の和歌を詠んだといつて、清書をする暇もなく、そのまま送つてよこされた。この頃は歌も非常に面白くなつた。五十首の中、十八首佳作として點がついたのも誠に不思議で、これは我が子を思ふ親の欲目からの見そこなひも御座いませう。その中に、

心のみ隔てずとも、旅衣、

山路かさなるをちのしら雲。

(心ばかりは少しの隔てもなく、いつもお側につき添うて居りまして、あなたのおいでになる旅の空は、山路が幾重も重なつて、遠く白雲の立つてゐる邊で御座いますから、身はどうしやうもなく、誠になさない事で御座います。)

とある歌を見るにつけて、これは旅の空に在る私の事を遙々思ひやつて詠まれたのだなと、うれしく思はれてしみじみ感に打たれたので、その歌の傍に、小さい字で、返歌を書き添へてやつた。

戀ひしのぶ心やたぐふ、朝夕に、

行きてはかへるをちのしら雲。

(遙か彼方の白雲は、朝に夕に、都の空の方へ行きつ歸りつしてゐる。私のあなたを戀ひしのぶ心も、あの雲と一緒に都へ行つて、果してあなたの胸に通ずるでありませうかしら。)



又、同じ旅の題で、

かりそめの草の枕のよるくを、

思ひやるにも袖ぞつゆけき。

(つひ一寸の旅寝の夜毎々々にも、どんな寂しい思ひをなされる事かとそれを思ひやるにつけても、私の袖は涙で露ッほくなります。)

といふ歌の書いてある所にも、又次のやうな返歌を書き添へた。

秋深き草の枕にわれぞ泣く、

ふり捨てて来し鈴蟲の音を。

(秋深き叢に鈴蟲が聲をふり絞つて鳴くやうに、私も都に振り捨てて来た子供の事を思つて、秋のふけた旅寝の床に、つひ聲を出して泣き悲しんで居るので御座います。)

又この爲相の送つてよこした五十首の歌の奥に、手紙の文句を書き添へた。大體歌のよみ方などの事を記しつて、その最後に、亡き夫の歌、

これを見ればいかに思ひつる

人に代りてれこそ泣かるれ。

(これを見たらまあどんなにかと思はれるその人に代つて、自分がつひおい／＼と泣けて了ふ事である。)

又旨 自分のむすこの歌の御自慢やら、それに對する自分の返歌やらである。子供の歌二首、格別のものではないが、さらりとしていやみがない、子供の歌としてはよく調つてゐる。それに對する筆者の歌の中で、「戀ひしのぶ」の方はしんみりしてゐて、歌だと思ふ。「秋深き」は「ふり捨てて来し鈴蟲の音を」などいふ例の技巧が

や、煩はしい感じを與へる。爲家の歌は、歌自體としては何でもないが、この情調には正にうつてつけてである。

〔評義〕

○侍従の宰相の君 侍従で宰相(參議の唐名)を兼ねてゐるもの。爲相のこと。○くだされたり 送つてよこされた。都から鎌倉へだから「下す」というたのである。○をかしくなりけり 面白くなつた。上達して上手になつたの意。一本に「おとなしくなりけり」とある。その方に従へば、大人びて来た、大人らしい詠み口になつたの意。○點あひぬるも 佳作として點をつけたといふ事。和歌などを評する場合に、自分の心に叶つた佳作に點をつける、それを合點といふ。「點合ひぬる」は合點になつたといふ意。古今著聞集卷五、和歌の條に、「土御門院、始めて百首をよませおはしまして、宮内卿家隆朝臣のもとへ、見せにつかはされたりけるが、あまりにめでたく不思議に覺えければ、御製のよしをばいはで、何となき人の詠のやうにもてなして、定家朝臣の許へ點を請ひにやりたりければ、合點して、褒美の詞など書きつけ侍るとて、懷舊の御歌を見侍りけるに、秋の色をおくりむかへて雲の上になれにし月も物わすれすな。」云々。○あやしく 不思議な事。○心の闇のひがめ こそあるらめ 子を愛する心からの見そこなひがあるであらう。「心の闇」は後撰集の「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」の歌の語を取つたのであらう。「ひがめ」は見違ひ。○心のみ隔てずとも 心だけは少しの隔てもなくあつても。心だけはいつもお側についてをりましてもの意。一本「心こそ」とある。○旅衣 母が旅の空にゐるのをいふ。○山路かさなる 山路の幾重も重なつてゐる、山がいくつも重なつて遠く隔つてゐる。「かさなる」は衣の縁語。○をちのしら雲 遠方の白雲。母が遠く離れてゐて而會も出來ず、自分の身で如何ともする事が出來ぬといふ意を寓した語。○旅の空を思ひおこせて 旅中の事を思つてよこして。「思ひおこせて」はこちらの立場からいうた語で、語の内容は「思ひやりて」と一致する。○心をやりて 心に満足を感じ



えて、うれしくなつて。それによつて心を慰めての意。○あはれなれば、感慨が深いから。真情をしみつくと感じて我が子を可憐に思ふといふやうな感じを寓した語。○戀ひしのお心やたぐふ、戀ひしのお心が伴つて行くかしらん。「戀ひしのお」は故郷なる御身をじつと戀ひ慕ふの意。「たぐふ」は伴ふ、一緒につれ立つの意。○行きてはかへる、行つたり來たりする。都の空に往來するといふ意。○おなじ旅の題にて、前の歌と同様に旅の題で。○かりそめの草の枕のよる／＼を、ほんの一寸の旅寢の毎夜のさまを。長い旅と限らず只一寸の旅でも毎夜毎夜どうして暮されるかと思ふにつけてといふのであらう。「かりそめの」を「草の枕」そのものの形容詞として「かりそめである所の旅寢」といふ風に見ても通じさうだが、やはり前解のやうに見る方がすなほだらう。○思ひやるにも、想像して見るにつけても。○袖ぞつゆけき、袖がしめつばい。涙で袖が濡れるといふのを、「草の枕」の縁で「露けき」というたのである。○秋深き、秋も更けた、秋も末になつた。○ふり捨てて來し、振り捨てて來た。子供を故郷に捨て置いて來たといふ意。この日記の初の方に「さのみ心よわくはいかかと、つれなくふり捨てつ」とある。こゝは「振り」が「鈴蟲」の「鈴」の縁語になつてゐる。○鈴蟲の音を、「われぞ泣く」の上に置くべき語。鈴蟲の音に泣く如く我も聲を出して泣くの意。文法的には兎に角、語感の上から見て、「鈴蟲のやうな聲を出して泣く」といふ解は頗るなかしい。○奥、末、終。○詞、手紙の文句。○おほかた、大體、あらかた、一通り。「記しつけて」に掛る副詞。○歌のさま、歌のよみやう等の事。○昔の人、故人。亡父爲家を指す。○これを見れば、原歌では「これ」が何を指すか分らぬが、今阿佛尼は、この爲相の歌を見たらの意に轉用してゐる。○いかばかりかと、原歌では「れこそ泣かるれ」の呼應上、どうしても、どんなに悲しまうかとの意と考へられる。所が今阿佛尼は、寧ろ「どんなに喜ばれようかと」の意に轉用してゐるものと思ふ。旦那さまが我が子のこの歌を御覽になつたら、まアどんなにお喜びになるだらうと思ふと、悲しくて泣けて了ふといふのがこの歌をこゝに應用した筆者の正味の意味だらう。○思ひつゝ、思ふ所の。こゝの「つる」は「た」といふテンスの意

味でなく、單なる慣用強辭と見るべきだらう。○れこそ泣かるれ、おい／＼泣けて來る。「れなく」は聲を立てて泣くをいふ。「泣きたくなる」といふよりも、自然に泣けて來るといふ方である。

侍従の弟爲守の君の許よりも、三十首の歌をおくりて、「これに點あひて、わろからむ事をこまかにしるしたべ」といはれたり。今年は十六ぞかし。歌の口なれば、やさしく覺ゆるも、かへすがへす心の聞と、かたはらいたくなむ。これも旅の歌には、こなたを思ひて詠みたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々の許へ遣したりしを、詠まれたりけるなめり。

立ちわかれ、富士の烟を見ても、なほ、  
心ほそさのいかに添ひけむ。  
又、これも返を書きつく。

かりそめに立ち別れても、子を思ふ  
おもひを富士の烟とぞ見し。

通解 侍従爲相の弟爲守殿の所からも、三十首の歌をよこして、「これに評點をつけて、いけない所をこまかに書いて下さい」と言はれた。この子は、今年十六なのである。兎も角も歌の口調になつてゐるので、殊勝な事に思はれるのも、吳々も親の欲目と、我ながら笑止千萬な、お聴しい次第で御座います。この子も、旅の歌につい



ては、こちらの事を思つて詠んだなと思はれます。前に私が鎌倉へ下つた其の間の日記を、この人々の所へ送つてやつたが、それを題材として詠まれたものと見える。

立ちわかれ、富士の烟を見ても、なほ、心ぼそさのいかに添ひけむ。

(都の地を立ちわかれて、遙々と東國に下る道すがら、富士の烟を御覽になるにつけても、やはりまア、どんなにか御心細さのまさつた事で御座いましたらう。)

又、これにも返歌を書きつけた。

かりそめに立ち別れても、子を思ふ  
おもひを富士の烟とぞ見し。

(たゞ一寸立ち別れて居るだけでも、子を思ふ親の思ひは、恰ももえ立つ富士の烟のやうに、誠にはげしい物だと観じた事で御座います。)

末の息爲守の歌について書いてある。これも子供白慢に一寸自己辯解をやつてある筆つきが面白く讀まれる。歌はどちらともつまらぬ代物のやうに思ふ。

○點あひて、よい歌に評點をつけてといふ意。○わるからむ事、わるい所、よくない點。「わるき事」の婉曲技法。○十六ぞかし、「ぞかし」といふ中に、まだ子供だのに仲々しつかりした歌を詠むといふ白慢の心持がにじみ出してゐるやうだ。但、十六は十四の誤寫だらう。残り抄に、「常樂記に、嘉曆三年十一月八日曉月房(爲守の事)終焉歌、むとせあまりよとせの冬のながきよの夢をみはてぬるかな、これによれば、弘安元年は爲守十四なり、諸本十六とあるは誤なるべし」とある。○歌の口なれば、歌の口振だから、歌の口調になつて

あるから。「歌の詠み初め」といふ解は全然の誤。○やさしく覺ゆ、殊勝に思はれる、けなげに思はれる。○かへすがへす、吳々も、かまされがされ。○心の闇、前にも出てゐる通り、心の愛に引かれて理非の判断を失ふこと。○かたはらいたくなむ、笑止な事である。原義は、はたから見てもはら／＼するといふ意で、或る者の態度を他から見ていふ感じであるが、こゝは自分自らの態度を自分で斯う評してゐるのだから、自分ながら笑止だ、或は、他の方に對して恥しいの意だらう。○こなたを思ひて、こちらを思つて、鎌倉にある私の事を思つて。○下りしほ、どの日記、鎌倉へ下向した折の日記。「ほど」は折、時、時の意。○人々、爲相と爲守の二人。○詠まれたりけるなめり、それを題材として詠まれたものと見える。○立ちわかれ、故郷の地から別れて。○富士の烟を見てもなほ、富士の烟を見るにつけてもやはり「旅はたゞさへ心細いものであるのに、富士の山の烟を見て一層」と解した本があるが、それなら原歌が「富士の烟を見るになほ」とあるべきものと思ふ。○心細さ、「細」は「烟」の縁語。○おもひ、おもひの「ひ」を「火」に掛けて「烟」の縁語としてゐる。○富士の烟とぞ見し、富士の烟と見た。恰も焼え立つ富士の烟の如きものと観じたといふ意。「見し」を「思ひし」と片付けても通じようが、それよりも少し深く、「なるほど子を思ふ思は富士の烟のやうなものだなアとしてみ／＼覺つた」といふ心持と考へられる。従つて「見し」を「観じた」と解するのが一番しつくりするやうに思ふ。

また權中納言の君、こまやかに文書きて、「くだり給ひし後は、歌よむ友もなくて、秋になりては、いとと思ひ出で聞ゆるまゝに、ひとり月をのみ眺めあかして」など書きて、

東路の空なつかしきかたみだに、

忍ぶなみだにくもる月かけ。



この御返事、これも故郷の戀しさなど書きて、

かよふらし、都のほかの月見ても、

空なつかしきおなじながめは。

都の歌ども、この後おほく積りたり。又書きつくべし。

又権中納言殿が、こま／＼と手紙を書いて、「あなたが鎌倉へお下りになつた後は、私は歌を詠む友達もなくて、秋になつては、いよ／＼思ひ出し申上げますので、唯一人月ばかり眺めて夜を明かして居ります。」など書いて、

東路の空なつかしきかたみだに、

忍ぶなみだにくもる月かけ。

(あなたが行つて居られる東國の空がなつかしくて、せめてあなたの御かたみと思つて眺める月影までが、あなたを戀ひしたふ涙のために曇つて、よく見えません。何といふ悲しい事です。)

この御返事、これも故郷の戀しさなどを書いて、

かよふらし、都のほかの月見ても、

空なつかしきおなじながめは。

(私が今、都から離れたこの鎌倉に在つて月を眺めても、やはり都の空をなつかしく思ふその思は、あなたが都の月を眺めて、こちらをなつかしく思つて下さるその御心と相通ふものと見えます。)

都からの歌の数々、この後も澤山に積つた。又更めて書きつける事にしよう。

【文旨】 いよ／＼通信に関する記事の最後である。これで権中納言との贈答の記事が五回になる。この後もあつたらうし、記録に漏れたのもあらう。兎に角権中納言との贈答が特に多く記録されてゐる事から、兩者の間の親密さが窺はれる。権中納言の君は、爲氏の同母弟爲教の女だから、本来なら今度の訴訟についても爲氏に附く筈だが、爲氏(二條家)と爲教(冷泉家)とが勢力争ひをして仲が悪かつた結果、却て阿佛尼の方に同情してゐたものと考へられる。

【語義】 ○こまやかに、くはしく、こま／＼と。○くだり給ひし後は、あなたが鎌倉へ下られた後は。○いと、なほ一層。ふだんでもあなたの事を思ひ出すが、秋は常より寂しいのでなほ一層思ひ出すといふのである。○思ひ出で聞ゆるまゝに、思ひ出しますので。「聞ゆ」は「申す」とか「ます」といふに當る敬語動詞。○眺めあかしで、悲しい思ひでじつと見入つて夜を明かしまして。下に「をります」「淋しく暮して居ります」などいふ思想を補つて見よ。○東路の空なつかしきかたみだに、あなたのある東國の空をなつかしく思ひ、そしてそのあなたを思ひ出すなつかしい記念として眺める所の物即ち月さへもといふ意。○忍ぶなみだに、戀ひしので泣くその涙のために。○これも、その返事も。○かよふらし、あなたは都の月を見てこちらの私をお慰び下さるとの事でありませんが、私だつてやはり異郷の月を見ましても、都なつかしく眺め入ります、その同じ心持はあなた様のその同じ御心持と相通ふ事でありませうといふ意だらう。「通ふ」を「似通ふ」と見て、「私が都をなつかしく思ふのは、丁度あなたがこちらを戀ひしたふのに似てゐるらしい」と解する説が一般に行はれてゐるやうだが、歌全體の感じとして少し片付け過ぎるやうに思ふ。尤も「互に似通つてゐて結局同じ事でありませう」といふやうに見れば、それでもよからう。○又書きつくべし、こゝで一旦筆を擱いて、又折があつたら書き付けませうといふ意。



しきしまや	やまとのくには	あめつちの	ひらけはじめし
むかしより	いは戸をあけて	おもしろき	かぐらのことば
うたひてし	さればかしこき	ためしとて	ひじりの御代の
みちしるく	ひとのこゝろを	たねとして	よろづのわざを
ことの葉に	おにがみまでも	あはれとて	やしまのほかの
よつのうみ	なみもしづかに	をさまりて	そら吹くかぜも
やはらかに	えだも鳴らさず	降るあめも	ときさだまれば
きみくくの	みことのまゝに	したがひて	和歌のうら路の
もしほぐさ	書きあつめたる	あとおほく	それがなかにも
名をとめて	三代まで継ぎし	ひとの子の	おやのとりわき
ゆづりてし	そのまことさへ	ありながら	おもへばいやし
しなのなる	そのはゝき木の	そのはらに	たねを蒔きたる
とがとてや	世にもつかへよ	生ける世の	身をたすけよと
ちぎり置く	須磨とあかしの	つゞきなる	ほそかはやまの

やまがはの	わづかにいのち	かけ樋とて	つたひしみづの
みなかみも	堰きとめられて	いまはたゞ	くがにあがれる
いをのごと	かぢを絶えたる	ふねのごと	寄るかたもなく
佗び果つる	子をおもふとて	よるのつる	泣く泣くみやこ
出でしかど	身はかずならず	かまくらの	世のまつりごと
しげければ	きこえあけてし	ことの葉も	えだにこもりて
うめのはな	四とせのはるに	なりにけり	ゆくへも知らぬ
なかぞらの	かぜにまかする	ふるさとは	のき端も荒れて
さゝがにの	いかさまにかは	なりぬらむ	世々のあとある
たまづさも	さて朽ち果てば	あしはらの	みちもすたれて
いかならむ	これをおもへば	わたくしの	なけきのみかは
世のためも	つらきためしと	なりぬべし	行くさきかけて
さまざまに	書きのこされし	ふでのあと	かへすがへすも
いつはりも	おもはましかば	ことわりを	たどすのもりの



ゆふしでに	やよやいさゝか	かけて問へ	みだりがはしき
すゑの世に	あさはあとなく	なりぬとか	いさめ過ぎしを
わすれずば	ゆがめることを	またたれか	引きなほすべき
とばかりに	身をかへりみず	たのむぞよ	その世を聞けば
さてもさは	のこるよもぎと	かこちてし	ひとのなさけも
かゝりけり	おなじはりまの	さかひとて	ひとつながれを
汲みしかば	野なかのしみづ	よどむとも	もとのこゝろに
まかせつゝ	とゞこほりなき	みづぐきの	あとさへあらば
いとゞしく	つるがをかへの	あさひかけ	八千代のひかり
さし添へて	あきらけき世の	なほもさかえむ	
ながかれと朝夕いのる君が代を、			

やまことばに今日ぞのべつる。

【文旨】 長歌と反歌とである。長歌は萬葉時代に於ては五七調であつたが、後にはその形式を踏襲するだけで、本質からいへば純然たる七五調になつてゐる。これもその一例である。この長歌の内容は、

- (一) 和歌の效驗と勅撰集の由来
  - (二) 領地横領の歎きとその訴訟
  - (三) 家庭の慘狀と歌道の衰頹
  - (四) 主張貫徹の期待と古人の類例
- 大體斯ういふ風であつて、その内容は、本書巻頭の「更に思ひつゞくれれば」から「ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる」までの思想に、
- (一) 訴訟がそのまゝ四年も握りつぶしになつてゐる事。
  - (二) 北條泰時の「世の中に麻はあとなくなりけり」の歌の引用。
  - (三) 藤原俊成の女の「残る蓬が敷をことわれ」といふ歌によつて地頭の非をとめたといふ故事。
- を織込んだといふに過ぎない。そこで本書は、巻頭巻尾が思想的に全然一致し、その間に、紀行の和歌と贈答の和歌と、そしてそのそれ／＼に伴ふ記録とが這入つてゐるといふ形である。この長歌は韻文としては殆ど何等の藝術味の認められないもので、要するに、自慢と愚痴と希望とを七五調で／＼と續けて、それを「五七五七……七七」といふ長歌の形にデッチ上げたといふ迄である。今理解の便のために、五七とか七五とかいふ韻文調に關係なく、意味本位に句讀を施し、且つ顯著な省略を補つて、前記四項目の分類に従つて書いて見よう。
- 【(一) 敷島や大和の國は、天地の開け始めし昔より、岩戸を開けて、而白き神樂の言葉歌ひてし(ものぞ)。されば畏き例として、(之によりて)聖の御世の道(も)著く(なり)、人の心を種として、萬の業を言の葉に(言ひ出づれば)、鬼神までもあはれ(と思ふ)とて、八島の外の四つ(の海(までも)、波も靜かに治りて、空吹く風も和かに(て)枝も鳴らさず、降る雨も時定まれば、君々の勅のまゝに従ひて、和歌の浦路の藻鹽草、書き集めたる跡多く(世に傳れり)。



(二)それが中にも、(撰者としての)名を留めて三代まで繼ぎし人の子の、親の取分き譲りてしその誠さへありながら、思へば賤し(き)信濃なるその籔木の藪原に種を蒔きたる告とてや、「世にも仕へよ、生ける世の身を助けよ」と契り置く、須磨と明石の續きなる細川山の山川の、僅かに命掛樋とて傳ひし水の水上も、堰き止められて、今は唯、陸に上れる魚の如、楫緒絶えたる舟の如、寄る方もなく佗び果つる子を思ふとて、夜の鶴泣く泣く都出でしかど、身は數ならず、鎌石の世の政繁ければ、聞え上げてし言の葉も、枝に籠りて、梅の花、四年の春になりにけり。

(三)行方も知らぬ中空の風に任する故郷は、軒端も荒れて、さゝがにの如何さまにかはなりぬらむ。世々の跡ある玉章も、さて朽ち果てば、葦原の道も廢れて如何ならむ。これを思へば、私の歎のみかは、世の爲もつらき例となりぬべし。

(四)行く先掛けて様々に書き残されし筆の跡(を)返す返すも偽と思はましかば、理を糺の森の木綿垂に、やよや聊か掛けて問へ。「亂りがはしき末の世に、麻は跡なくなりぬ」とか諫め置きしを忘れずば、歪める事をまた誰か引き直すべきとばかりに、身を顧みず頼むぞよ。その世(の事)を聞けば、さてもさは「残る蓬」とかこちてし人の情も斯かりけり。同じ播磨の境とて、一つ流を汲みしかば、野中の清水淀むとも、元の心に任せつ、滞りなき水莖の跡さへあらば、いとどしく鶴が岡邊の朝日影、八千代の光さし添へて、明けき世の尙も榮えむ。一章の長歌を幾つかに分つ事は不自然ではあるが、餘り長くなつては通解と語義との對照に不便だらうと思ふから、上記五項の分割に従つて、五節に分けて通解する事とする。

**通解** 我が日本の國は、天地開闢の昔から、面白き神樂の詞を謡つて、岩戸の中にお籠りになつた天照大神を慰め奉り、その力で岩戸を開けて大神を出し奉つたものである。だから歌といふものは、誠にありがたい例とな

つて、聖天子の御代の道も、之によつて明かになり、人の心を種にして、人事百般の事を言葉に表現して歌とすれば、荒く恐ろしい鬼神までもしみんと感動する。さういふ有難いものなので、我が日本の國は勿論、國外の四方の國々までも靜かに治つて、空を吹く風もやはらかで枝も鳴らさず、雨も時を定めて降るといふやうに、天下太平であるので、代々の天子様の詔に従つて、和歌を書き集めた所の勅撰集は、澤山世に傳つてゐる。

**語義** ○しきしまや「やまと」の枕詞。大和の國磯城郡に磯城島といふ所があつて、そこに垂仁、欽明、敏達等の諸帝の皇居があつたので、大和の枕詞となり、遂にそれが大日本といふ意にも用ひられるやうになつた。○やまとのくに 日本國。大和の國は上代の天皇の皇居の地であつた所から、日本全國の稱にも用ひられるに至つたのである。○あめつちの云々 この意味は、本書巻頭の「日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて」の條で詳説した通りである。諸註、迄が和歌の起源を敘したものととして、「歌ひてし」の下に「それが和歌の起源である」といふやうに補ひ解してゐるが、巻頭の文と同様に、筆者の意圖は、歌の起源を敘するに存しないで、抑もの始源から歌は斯ういふ大切な事に用ひられたものだといふ事を述べようとするに在ると思ふ。さう見ないと、「昔より」さればかしきためしとて」等の句が一向に利かなくなつて了ふ。○かしきためし ありがたい例。たつとい例。さういふありがたい前例があるので、歌をつくる事がたつとい例となつてといふ思想と考へられる。○ひじりの御代 聖天子の御代。○みちしるく 政道が明かになり。○ひとのこゝろをたれとして 人の心に思ふ事を資料として。古今集の序に「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」とある文句をそのまゝ、取つたのである。○よろづのわざ 世の中の種々様々な事柄。○ことの葉に 言葉に述べ現はして歌とすれば。○おにがみまでもあはれとて 鬼神までも感動するものであるの。これも古今集の序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」とあるのを取



つたのである。○やしま、日本の國、大八洲ともいふ。○よつ、うみ、四海の直譯、天下の意。○なみ、しづか、四海波靜かに。天下が靜かに治つてゐるのをいふ。○そら吹くかぜもやはらかに云々、これも天下の太平な事をいふ。王充の論衡に、「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴、枝、雨不破塊」とある。それを取つた文句。○きみ、く、歴代の天皇。○みこと、のま、にしたがひて、勅命の通りに従つて。○和歌のうら路のもしほぐさ「和歌の浦路」は和歌の浦といふ地名を以て和歌を表はし、「藻鹽草」は「掻き集め」る意から「書き集め」の縁語としたのである。○書きあつめたるあとおほく、「みことのま、にしたがひて」からこの句について、勅撰集が澤山ある、澤山世に傳つてゐるといふ意をあらはしたのである。

通解 それ等の中でも、撰者たるの名譽を残して、父子三代まで續いて來た人が、親の特別に譲り與へて置いた、その確かな證據もちやんとありながら、思へば賤しい身分のこの母の腹に宿つたのがであらうか、「これを資料として君にも仕へよ、一生涯の生活をも管め」と、約束して置かれた所の、須磨と明石の地續きの細川の莊——辛うじて一命を繋いで行くべき命の綱として親から傳へられたその土地も、空しく横領されて了つたので、今は唯もう岡に上つた魚の如く、又楫の緒の切れた舟の如く、頼るべき方もなく、途方に暮れはててゐる我が子を思ふが故に、子を思ふ親の至情として、泣く／＼都を出てこの鎌倉へ訴へに來たのであるが、我が身は數にも這入らぬ微賤の身の上であり、鎌倉幕府の御政道は繁多であるので、訴へ上げた言葉も、そのまゝになつて何の御沙汰もなく、早くも四年目の春となつて了つた。

通義 ○それがなかに、その多くの勅撰集の中でも。○名をとめて、撰者たるの名譽を世に残し留めて。○三代まで續きしひとの子、父子三代まで續いた者の子孫。俊成、定家、爲家と、父子三代まで相續いて勅撰集を撰んだその子孫の意で、爲相を指していつた言葉。○とりわけ、とりわけ、特別に。○そのまこと、その證據の

意。○おもへば、い、や、思へば賤しきその腹にと續く思想。○し、な、なる、信濃にある。は、き、木は信州國原にあつたものとして人口に膾炙してゐる。○は、き、木、の、そ、ら、は、ら、「箒木」に「母」を掛け、「國原」に「其の腹」を掛けたのである。昔、信州國原伏屋といふ所の森に、遠くから見ると箒のやうに見える梢があつて、近づいて見ると更にその影もなかつたといふ故事がある。新古今にも「その原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かな」といふ歌がある。○たれを蒔きたるととてや、宿つた罪であらうか。私のやうな賤しい母の腹に孕まれたその罪であらうかの意。○世にもつかへよ、世に出て仕へよ、官途につけ。我が譲り置く莊園を資源としての意を冠して見るべき句。○生ける世、生きてゐる世、一生涯。○身をたすけよ、生計を立てよ、生活して行け。○ちぎり置く、約束して置く。讓與する事を堅く約して置いたの意。「置く」は現寫法。○須磨とあかしのつゞきなる、攝津の須磨と播磨の明石とのつゞきである所の。須磨明石の附近に在る所のの意。○ほ、そ、か、は、や、ま、の、や、ま、が、は、の、句の表面の意は、「細川山の山川の掛樋」と續くのであるが、思想上からいへば、「細川山」は細川莊を意味し、「山川」は「細川」や「かけひ」「水」などの縁語とした修辭に過ぎない。○わづかにいのちかけ樋とて、僅かに一命を掛け繋ぐものとして。「掛樋」は地上に架して水を通ずる樋の事で、その「掛」に「一命を掛ける」の意を寓したのである。○つたひしみづ、親から傳つた細川の莊。「掛樋」の縁で「つたひし」といひ「水」といつたのである。○みなかみも堰きとめられて、上流が堰き止められて。細川の莊を横領された事を、川の縁語上、水が堰き止められたといつたのである。○くがに、あ、が、れる、い、な、の、こ、陸上に上つた魚のやうに。生活の道を失ひ途方に暮れてゐるといふのを、これも川の縁で岡に上つた魚に譬へたのである。○か、ち、を、絶、え、た、る、ふ、ね、の、こ、と「楫緒」は船繩、それが切れては舟は自由がきかなくなるので、これも前句と同様、生計の道を失ひ途方に暮れる意に譬へたのである。○寄るかたもなく、たよりつく方もなく、途方に暮れて。○怪び果つる、よわりぬいてゐる、困り切つてゐる。下の「子」に掛る修飾語。こゝで一小節のやうに切つた本があるが、それはひど過ぎる。



○よるのつる「焼野の雉子、夜の鶴」といふ諺もあり、又前に「いかばかり子を思ふ鶴の飛び別れ」といふ歌の所でも示した通り、「夜鶴憶子籠中鳴」といふ詩句もあつて、「夜の鶴」は子を思ふといふ意の慣用語になつてゐる。○泣く泣く「夜の鶴」の縁で、「鳴く鳴く」に掛けていうた語。○身はかすならず、我が身は取るにも足らぬ賤しい身の上だ。下に、「だから幕府でもかまひつけて呉れぬ」の意を含めて見ればよく分る。○世のまっりこといげければ、天下の政道が繁多だから。この下にも「私の訴などはかまつてゐる暇がなくて」といふ思想を補つて見よ。○きこえあげてしこの葉、言上した言葉、訴へ出たこと。○えだにこもりてうめのはな、訴訟が一向にはかどらぬといふ意を、梅の蕾の枝にこもつたまゝで開かぬといふ意に譬へたのである。そして「梅の花」は四年の春」といふための序詞にもなつてゐる。○四とせのはるになりけり、訴訟を起してから四年目の春になつて了つた。阿佛尼が鎌倉に着いたのが建治三年（一九三七）の十月で、この長歌は弘安三年（一九四〇）の春に書かれたものである。

【通解】 吹いて行く先も分らぬ大空の風の荒れすさぶに任せてあるやうな状態で、なるがまゝに打捨ててある故郷の家は、軒場も荒れ果てて、どんなにひどくなつた事だらう。代々の筆の跡を止めた貴重な書類も、そのまゝ朽ち果てたら、我が和歌の道も衰へて、どんな事になるであらうか。これを考へると、單に我が一身一家の歎のみではない、世の中のためにも實に悲しむべき事となるであらう。

【語義】 ○ゆくへも知らぬ「風」の形容詞的修飾語。何方へ吹いて行くか、丸で方向も分らぬ意。○なかぞらのかぜにまかす、空の風の吹くに任せてある。なるに任せて打捨ててあるといふ意を含めていうた言葉。○のき端も荒れて、家も荒れはてて。「軒端」は「家」の一部の名稱を以てその全體を代表させたのである。○さゝがに、下の「いかさまに」の「い」に掛る枕詞。「さゝがに」は蜘蛛の異稱で、「くも」又は「い」（蜘蛛の巣）の

枕詞として用ひられる。こゝは「いかさまに」といひ出す爲めの純然たる潤飾と見てよからう。「故郷の家はあれ、出で入る人もなく、たゞ蜘蛛の巣が張つてゐることをいつたのである」と解した書もあるが、それは立入り過ぎるやうに思ふ。○いかさまにかはなりぬらむ、どのやうになつた事だらう。さぞひどくあれてゐるだらうの意。○世々のあとあるたまづさ、代々の人々の筆の跡をとどめた文書。俊成、定家、爲家と歴代の人々を書いて残した歌書をいふ。「玉章」は普通手紙の美稱として用ひられるが、こゝは文章の意。○さて、そのまゝ。○朽ち果てば、廢れ亡びて了つたら。「朽ち果てて」となつた本もある。○あしはらのみち、我が國の道、即ち和歌の道といふ。我が國の別稱を豊葦原の瑞穂の國とか、葦原の中つ國とかいうたからの稱。○わたくしのなげきのみかは、一身一家の歎のみではない。「わたくし」は公に對して個人に關する事をいふ。「かは」は反語。○世のため、世の中のためにも、社會國家に取つても。○つらきためし、歎くべき事例。

【通解】 後々の事に迄涉つて、色々書き残して置かれた爲家卿の遺言状を、どこまでも偽りと思ふ人があるなら、物の事理をたゞといふ糺の森の神様のおさばきに掛けて、一つ尋ねて見て下さい。「亂れきつた末の世には、曲りくねつた蓬ばかりはびこつて、眞直な麻は跡かたもなくなつた」とかいつて、戒め置かれたその言葉を、役人方がお忘れにならなかつたら、人の領地を横領するといふやうな曲つた事を、誰が又わざ／＼引き直して正しいものと見る事があらうと、斯う考へて、賤しき身をも顧みず、幕府から正しい判決の下るのを頼みにしてゐる次第である。又昔の世の事を聞いて見るに、さてもあのやうに、「残る蓬の敷をことわれ」と歎き訴へた方の御心情も、丁度今の私の心持のやうなものであつたのだ。さうして勝訴となつたその方の訴も私の訴も同じ播磨の地といふわけで、何から何まで同じやうな運命に立つたのであるから、かの有名な野中の清水が滞つても、またもとの清さに戻つてさら／＼と流れるやうに、一時邪曲のために憂き目に遇つても、横領された領地はまたもと通



り正しくこちらのものになつて——それに父、明白にして疑なき證文まであるからには、破邪顯正の正しいお裁を下されて、隆々たる鎌倉幕府の御威光は、いよ／＼益々永遠の光輝を加へ、政道明かな御代は、なほも限りなく榮える事であらう。

ながかれと朝夕いのる君が代を、

やまとことばに今日そのべつる。

(君が代の幾久しく榮えましますと、朝夕お祈り申す心なば、一篇の歌として、今日始めて申述べた次第であります。)

○行くさきかけて、將來の事まで心配して。但、「かけて」の語義は「行くさきをかけて」即ち行くさきまでを對象としての意で、「心にかけて」の「かけて」ではなからう。○ふでのあと、文字、文章。爲家の遺言状を指す。○かへすがへすも、吳々も、どこ迄も。○おはましかば、若しも思ふならば。○ことわりをたゞすのもり、「ことわり」は道理、「糺の森」は下賀茂の社に並んで賀茂高野二川の相會する地にある森で、この中に小社宅神社がある。「たゞす」に理非曲直をたゞすといふ意があるので、新古今集に、「い。つ。は。り。を。糺。の。も。り。の。ゆ。ふ。だ。ず。き。か。け。つ。誓。へ。我。を。思。は。ば。」とあるやうに、古來理非を糺問する神の意に言はれてゐる。こゝも、物の道理をしらべた。だす糺の森の神の意。○ゆふして、木綿垂とも木綿四手とも書く。「木綿」即ち楮の皮で作つた布のしで。「垂」は玉串又は注連繩に垂れる紙片又は布片の稱。掛け垂すものであるから、下の「かけて」の縁語として出したのである。○やよや「さあ」と他を呼び掛ける詞。○いさゝかかけて問へ、聊か神に掛けて問ひ試みよ。「かけて」は引き合ひに出してといふ思想。文としては「ゆふしてに掛けて問へ」といふつゞき。○みだりがはしき、道義のみだれた。○すゑの世、末世、澆季の世、人心が悪くなり風俗の衰へた世の中。○あさはあとなくなりぬ、麻

は真直なものであるから、正義正道に譬へる。即ち、正義正道は世の中から跡形もなく消えたの意。新勅撰集、北條泰時の歌に、「世の中に麻はあとなくなりけり、心の儘の蓬のみして」とある、その歌の句を少し變へて引いたのである。蓬は邪曲に譬へる。○いさめ置きしを、戒め置かれたのを、泰時が前の歌によつて世人を戒め置かれたその事をの意。○わすれずば、鎌倉幕府の役人たちが忘れなかつたらの意。○ゆがめることを、曲つてゐることを、正道に外れた事を、○またたれか引きなほすべきとばかりに、誰が引きかへて正しいとするものがあらう、そんな人はない筈と考へて、「引きなほす」は曲事を正事に返らすといふやうに見るのが語としては自然だが、さればといつて、或書のやうに、「今の爲氏の曲事を誰が又、正しきに引き返らしめるであらうか、それはどうしても只今の執權時宗朝臣に限ると思つて」と解するのは、「忘れずば」「又誰か……べき」といふ原文に對して甚だ無理であらうから、「曲つた事を無理に正しいとする」の意に取る外あるまい。「とばかりに」は、「只管……と考へて」といふ趣の慣用語。○身をかへりみず、我が身の賤しい事をも顧みず。○たのむぞよ、幕府の正しい判決を頼みにして待つて居るのだ。○その世を聞けば、昔の世の事を聞いて見ると。○さてもさは、さてまアそのやうに。○のころよもぎとかこちてし、「残る蓬」と歎き訴へた。本書の奥書にも見えてゐる通り、藤原俊成の女が、父から譲られた播磨越部の莊の收入を、地頭の非法によつて妨害された時、鎌倉幕府に訴へ出るのに、前記泰時の歌を本歌として、「君ひとりあとなき麻のみを知らば、残る蓬の數をことわれ」といふ歌を奉つて、遂に勝訴になつたといふ事を指す。○ひとのなさげもかゝりけり、その人即ち俊成の女の心情も、この私の心持のやうであつた。○おなじはりまのさかひとて、俊成の女は播磨國細川の莊、自分は播磨國細川の莊で、共に播磨の地域であるので。○ひとつながれを汲みしかば、同じ境遇に立つたから。同じく歌道の家柄で、同じく領地を横領されて訴へ出るといふやうに、彼此同じ運命に立つてゐるといふ意をいつたのである。○野なかのしみづよどむも、「野中の清水」は播磨國明石郡岩岡村にあつた有名な清水。「よどむ」は水の滯つて流れぬをいふ。邪曲な爲氏



の爲めに正しく譲られた領地が一時横領されての意。○もとのこころにまかせつゝ、濁り滞らなかつた本通りの趣にして。自分の正しい主張が通つて本々通り領地がこちらのものになつての意。この句は一鶴が岡邊の朝日影」云々に掛るものと見るべきである。なほ、「野中の清水……まかせつゝ」の句は、古今集雜の「古の野中の清水ぬるけれど、もとの心を知る人ぞ汲む」とあるのを背景にしたのである。○とどほりなき、澁滞なき。明白にして疑ふべからざるの意。前の「よどむ」を受けて、水の滞りなく流れる意を兼ねたのである。○みつぐきのふと筆の跡、書かれた文章。爲家卿の證書を指す。前句を受けて「滞りなき水」とした言葉の綾である。○さへあらば、までもあらば。「水壅の跡さへあらば」は挿入句である。事實證據文書があるのだから、「さへあれば」とあるが當然だが、下に推量の形があるから、それに順應させて「あらば」としたのだらう。句としての思想は、「上述の如き次第で、その上に又確實な文書まである事だから、必ずこちらの正しい主張が通り、従つて鎌倉幕府の御威光は益々輝くに違ひない」といふ事である。○いとどしく、いよゝゝ、益々。○つるがをかねのあさひかげ八千代のひかりさし添へて、鶴が岡の邊からさし出る朝日の光が、幾千年も變らぬ光を加へて。鎌倉幕府の勢威の永遠に益々輝き榮えるをいふ。「鶴が岡」は鎌倉の鶴が岡八幡宮。○あきらけき世、政道の明かな世。○なほもさかえむ、この上にもなほ一層榮えるだらう。○ながかれと朝夕、いのる君が代、幾久しく榮えませと朝夕祈る所の大君の御代。句の本意は、御代久しかれと祈るその心持といふ事である。なほこの歌のやうに、長歌に附屬する短歌を「反歌」といふ。それは長歌全體の意味を約めていふか、又それに述べきれず意の足りないのを補ふかするものである。○やまこととば、日本の言葉の意で、こゝは和歌の事をいふ。○今日そのべつる、常日頃思つてゐた事を今日始めて述べたといふ意。

「残る蓬とかこちける」といふ所の裏書に、「皇太后宮の太夫俊成の卿の御女、父のゆづりとして、播磨國越部の莊といふ所をつたへしられけるを、地頭のさまたけ多くて、むかし武藏の前司へ、ことなる訴訟にはあらで、まるらせられける歌、新勅撰にも入り侍るとやらむ、「心のまゝの蓬のみして」といふ歌をかこちて申されける歌、

君ひとりあとなき麻のみを知らば、

のこるよもぎが數をことわれ。

と詠まれければ、評定にも及ばず、廿一個條の地頭の非法を、皆とどめられて候ひけり。その後、野中の清水を過ぐとて、

忘れぬもとの心のありがほに、

野中のしみづかけをだに見し。

と詠まれたるも、その越部の莊へ下られける時の歌にて候ふ。新勅撰に入りて侍りし。』

永仁六年三月一日書レ之

通解 前掲の長歌中、「残る蓬とかこちける」といふ所の裏書に次のやうに書いてある。『皇太后宮の太夫俊成卿の御息女が、父より譲られた領土として、播磨國越部の莊といふ所を承け傳へて領有されてゐた所が、地頭の妨



害が多くて困つたので、昔、前の武藏守北條泰時へ、特別の訴訟といふではなくて、差上げられた歌——それは、新勅撰にも入つて居りますとかいふ北條泰時の「心のまゝの蓬のみして」といふ歌を本歌として、それに事よせて詠まれた歌で、

君ひとりあとなき麻のみを知らば、

のころよもぎが敷をことわれ。

（あなたは嘗て「世の中に麻はあとなくなりけり」と詠ぜられたが、その通り正しいものの無い中に私一人が真正直である事を、若しあなた御一人知つて下されたなら、残る蓬——根絶しが出来ずに世にはびこつてゐる、さうした邪曲の悪人共の罪を調べて、理非曲直をお裁き下さい。）

と詠まれたところが、評議決定する迄もなく、即決で、廿一箇條もあつた地頭共の非法を、悉く皆禁じられたのであつた。その後、俊成卿の女は野中の清水のところを通るとて、

忘れぬもとの心のありがほに、

野中のしみづかけをだに見し。

（今もなほ世の人に忘れられぬ當初の趣があるやうに、野中の清水は清く澄み渡つて、影さへはつきりと映つて見えた事でした。）

と詠まれたのも、その越部の莊へ下られた時の歌であります。この歌は新勅撰に載つた事でありました。』

永仁六年三月一日、この奥書を書いた。

〔文旨〕 これは奥書の文句で、後人が卷末に附記したものである。その奥書は永仁六年とあるから、阿佛尼の歿後十五年のものである。

〔語義〕 ○裏書 古の書物は巻物になつてゐたので、表に漏れたことや又註の文句を裏に書くのである。綴本では卷末に書いて奥書といふ。こゝは、裏書に次のやうに書いてあつたと奥書に書いたのである。この裏書の文句は多分筆者自らのものではなくて、後人の書き加へたものだらうと思ふが、明かには決定されない。○皇太后宮の大夫 皇太后宮の御事に關する一切の事務を司る役。こゝの「大夫」は職（中宮職）の長官で、その時は、五位の大夫（たいふりタユウ）と區別して、特にタイアと讀むのである。○俊成の卿の御女 實は孫だつたのを、歌の道が優れてゐたので、子にしたのだといふ。越部の禪尼といふ。○つたへしられけるを うけ傳へて領有されてゐたのを。「しる」は領する、治めるなどの意。○頭地 莊園を支配したものの。頼朝の時に始めて諸國に置いた役人である。○さまたげ 土地の収入の妨害をして困つた事をいふ。○武藏の前司 前の武藏守北條泰時。○新勅撰 後堀河天皇の時、藤原定家の撰進した歌集。○入り侍るとやらむ 這入つて居りますとかいふ。次の歌句に掛る形容詞的修飾語。○心のまゝの蓬のみして 新勅撰、泰時の歌、「世の中に麻はあとなくなりけり、心のまゝの蓬のみして」世の中は、蓬のやうな邪曲のものが氣儘勝手にはびこつて、麻のやうに眞直のものは絶えて了つたといふ意。○かこちて、かこつけて、本歌として。「かこつ」には、かこつてる意と歎く意とある。かこつてるの方は、そのせいにする、愚痴をいふの意で、自然、不平をいふ、なげきわぶとなつて行くのであるが、「といふ歌をかこちて申されける」といふ文の「かこちて」を、「不平をのべて」と解するのは言葉のつゞきとして不自然だから、こゝは、「かこつてる」の轉意で、託して、事よせてといふ趣に用ひたものと見ていふと思ふ。○君ひとり あなたひとり。泰時に對していふ。○あとなき麻のみを知らば 泰時の歌の「麻はあとなくなりけり」を踏み、「み」に「實」と「身」とを掛けたもので、一句の意は、正直なものが跡なく絶え果てて、私人が麻のやうに正直な身である事を知るならばといふのである。○のころよもぎが敷 残つてゐる蓬の敷々。根



絶しが出来ずに数々世にはびこつてゐる悪人どもの意。○ことわれ、理非曲直を裁断せよ。○評定にも及ばず、役人たちを集めて評議決定する迄もなく、即決で。○非法、法にそむいてゐること。○とゞめられ、禁ぜられ。○忘れぬもの心のありがほに、人に忘れられぬ當初の趣があるやうなさまに。野中の清水の清らかであつた事は、今も人に忘れられずにあるが、その清かつたもの趣が今もあるかの如くにの意。古今集の「古の野中の清水ぬるけれど、もとの心を知る人ぞ汲む」の歌を踏んで作つたのである。○かげをだに見し、影さへはつきりうつて見えた。水の清らかな形容である。「だに」の使ひ方も普通でないし、影の見えるといふ事で、水の清い事を形容するのも事實上からいへば不自然だが、この歌自体はさう解するより外はあるまい。裏書としてこの歌を引いたのは、長歌に「野中の清水よどむとも、もとの心にまかせつ」とある所由を明かにするつもりだらう。従つて阿佛尼はこの歌の裏に、悪人も本心を失はないで、再びもとの正しい善心に返つたといふ意の寓せられてゐるやうに取つたものらしいが、この歌自体について見れば、それほどの意圖で詠んだものとは考へられない。○入りて侍りし、這入りまして御座います。「入つてゐます」といふ解は原文の趣に對してルースのやうに思ふ。○永仁六年、伏見天皇の御代。

この阿佛房と申す人は、定家の息爲家の室なり。きんだち五人まし／＼候ふ。播磨國細川の莊を、爲家より譲り置かれ候ふを、爲氏他腹によりて押領候ふ訴訟のために、鎌倉へ下られ候ふ時の道の日記にて候ふ。爲氏も陳狀のために、鎌倉へ下向、兩人ともに鎌倉にて死去せられし。訴訟は爲氏のかたへは附けられず候ひしとぞ。阿佛は安嘉門院の四條と申す人なり。爲相の母なり。

通解 この阿佛房と申す人は、定家の子息の爲家の奥方である。御子様達が五人いらせられます。播磨國細川の莊を、爲家から譲つて置かれたのを、爲氏が異腹即ち先妻の子であるために横取をいたしました事を訴へるために鎌倉へ下られました。本書はその時の道の日記であります。爲氏も事情を陳述するために鎌倉へ下つて、兩人共に鎌倉で死去せられた。訴訟は爲氏の方へは勝訴にされなかつたといふ事でありませぬ。阿佛は安嘉門院の四條と申す人である。そして爲相の母である。

文旨

これも後人の書き加へた奥書で、筆者の略傳と、十六夜日記の由來とを簡単に書いたものである。

通義 ○息、子息。○室、奥方、妻。○きんだち、お子様方。姓を賜へる皇子、皇孫、又は攝家、清華等の貴族の子をいふ語。○他腹、腹違ひ。先妻の子だから斯くいふ。○押領候ふ、奪ひ取りました。この「候ふ」は終止でなく、連體形で下に續くと見て然るべきだらう。「押領」はおし掠めて領する意で、横領と同義の語。○陳狀、事のさまを述べる。陳情と書くのと同義。○下向、下つて行く。都から地方に行くのをいふ。○つけられず正しい理由があると認められない。勝訴の判決が下されなかつた、即ち敗訴になつたの意。



昭和七年四月廿十日  
 昭和八年五月十五日  
 昭和九年四月十五日  
 昭和十年四月十五日  
 再版 第三  
 發行 第四  
 發行 第五  
 發行 第六

昭和五年三月十五日印刷  
 昭和五年三月十八日發行

▼通解十六夜日記▲  
 正價金一圓



著者 塚本哲三  
 發行者 三浦正  
 印刷所 有朋印刷社  
 印刷者 佐久間修三

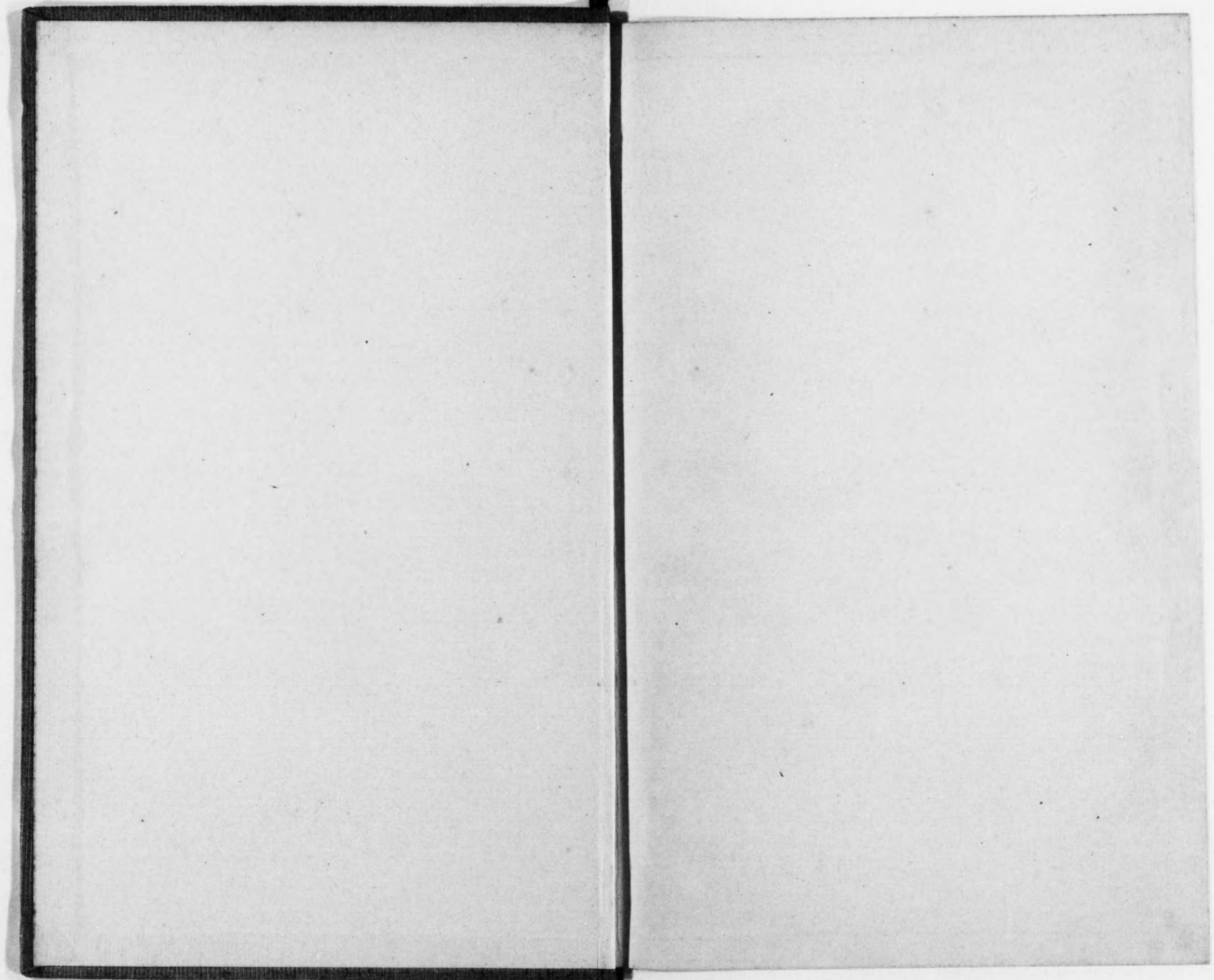
株式會社有朋堂代表者  
 三浦正  
 東京市神田區錦町一丁目七番地  
 有朋印刷社  
 東京市神田區錦町三丁目二番地  
 佐久間修三  
 東京市神田區錦町三丁目二番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
 振替口座東京七一四八

株式會社 有朋堂







終

